
歌って回す幻想郷放浪記

日輪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌って回す幻想郷放浪記

【Nコード】

N0008V

【作者名】

日輪

【あらすじ】

これは一人の変な少年の物語・・・

ぷろろーぐなのかー(前書き)

初投稿ですがなにとぞよろしくお願いします

ぷろろーぐなのかー

「幻想郷にいこう」

そう思ったのは咲夜いや、昨夜のことであつた。

俺の名前は僧音遼

そうおんりよう

年は14歳 いじめられっこである。（この説明をするたび悲しくなるのはなぜだろうか）

幻想郷に行く動機は、友達2人の失踪である。

三日前から姿が見えないとみんな騒いでいるが俺にはわかる彼らが幻想郷に行ったことが
装備は

ぶかぶかのジャンパー、フラフープ、財布、エコーがかかるマイク、ライター、折りたたみ傘、水などの食料

と、まあこんな感

じで幻想郷に行こうと思う

その前に言っておこう

この旅は友達2人を探す旅ではない。俺はただ、友達2人が幻想郷にいったから行く

つまりまねっこである。

じゃあ何の旅なのかというと・・・

フラフープ回しながら幻想郷の住民に俺の歌声を聴いてもらう旅です

（わかりやすく言うとフラフープ回しながら歌っている俺の姿を幻想郷の住民に披露するということです。）

「さて、そろそろ行くかな」

俺は家を出た

「ん？空が暗いな・・・雨でも降るのか？」

と思ったら

ゴ
パ
ア！

「っ！？」

足下にいきなりでっかい穴があいた

「う、うわあああああああ！」

俺はそのまま引きずり込まれてしまった。

ぷろろーぐなのかー(後書き)

引きずり込まれた遼少年の運命やいかに・・・

次回「巫女不在」をお楽しみに！

第一話 巫女不在（前書き）

こんばんは。そうじゃない人は、こんにちは。どちらでもない人は、
初めまして。日輪です

第一話 巫女不在

・・・

「ここは・・・」

俺はしばらく気を失っていたようだ。

「幻想郷か？」

辺りを見回したら何か神社のような建物があった。

「まさか！ここがUWASAの博麗神社！？」
はぐれいじんじゃ

俺はさっそく賽銭箱に金を投げ入れた

チャリンッ

「・・・ん？　そういえば、博麗霊夢とかって言う巫女の姿が見あたらないな・・・」

もしかしてここ博麗神社じゃないんじゃ・・・いや考えすぎか・・・

「霊夢さんなら留守ですよ」

「うわあ！」

ゴチン！

おどろいて地面に頭をぶつけてしまった

また気を失った・・・

「うゝん・・・」

「気がつきましたか」

「ここは？」

「ここは妖怪の山です私の名前は射命丸文^{しゃめいまるあや}」

「俺の名は僧音遼よろしく。」

「騒音量？」

「僧音遼！」

「・・・あっ！そうそう。遼さんの近くにこれ落ちてたんですけど
こっこれは！スペルカード！これがあれば俺のかっこよさがよりい
っそう引き立つぜ！

「そうだ！それは俺のだ！」

「やはりそうでしたか！よかった」

「お礼に俺の芸を見せてやる！いくぜえええええ！」

少年披露中・・・

「こっ・・・これは！なにかいい記事が書けそうです！それでは！」

そう言って文は飛び立ってしまった

「さて、俺もそろそろ行くかな」

俺は山を下ることにした。

第一話 巫女不在（後書き）

遼少年が向かったところはいったい・・・次回「巫女不在2」をお楽しみに！

第二話 巫女不在2（前書き）

おひさしぶりです。そうでない人も初めまして日輪です。

第二話 巫女不在2

妖怪の山を下り俺は博麗神社に足を運んでいた。

「おーい霊夢さーん」

だめだ・・・出てこない・・・やっぱりここは博麗神社ではないのだろうか・・・

「私に何か用かしら」

「うわぁ！」

ゴチン！

また気を失った・・・

「いてて・・・」

「気がついたみたいね」

「助けてくれて有り難う。あなたが博麗霊夢さん？」

「ええ、そうよ。」

「おいおい、怪しまないのか？俺は外来人だぜ？」

「あんたみたいなのは幻想郷にはたくさんいるのよ」

「なら話は早い、何で留守にしてたのか教えてくれ」

「いやよ」

「お賽銭入れたのに・・・」

「何円？」

「500円」

「やったああああああ！有り難う！」

「礼はいいから話を続けてくれ（はしやぎすぎだろ）」

「ちょっと用事があったって紅魔館にいったの」

紅魔館^{こうまかん} 聞いたことがある。たしかレミリアとかって言う吸血鬼がいるらしい他にもいろんなのがいるってUWASAだ。

（紅魔館に行って芸を披露すれば有名になれるかも！・・・たぶん。）

「紅魔館への行きかたを教えてくださいあと、俺の芸を観ろ。」

「ずいぶん唐突ねえ。まあいいわ教えてあげる。紅魔館は、少女説明中・・・」

「有り難う。では俺の番だ、いくぜええええ！ 少年披露中・・・」

「妙に歌と、フラフープ上手いわね・・・」

「ほめていただき感謝！ではさらば！」

「お賽銭有り難う～！ルーミアとチルノ居るから気をつけて～」

それを先に言ってくれ・・・

第二話 巫女不在2（後書き）

紅魔館に、向かった遼少年。果たして無事にたどり着けるだろうか・

次回「芽生えし能力の発動」をお楽しみに！

第三話 芽生えし能力の発動（前書き）

もう少しで誕生日の日輪です。

追記 題名編集しました。

追記 アイシクルフォースではなくアイシクルフォールでした。

第三話 芽生えし能力の発動

さいしょに一言

前回怪しまれなかったからって名前を言わなかったことに非常に後悔している。

(詳しくは巫女不在2をみてね！)

そして、なぜ敵が出てこない！？

おかしいだろ！？この小説お笑いじゃないんだからって・・・ん？

「たすけてえ〜！」

「チルノちゃん・・・もうあきらめようよ・・・」

「そうなのかー」

あれは、チルノと大妖精とルーミア・・・様子がおかしい。

木に縄で縛られている

これは放っておけない！

「おーい！大丈夫か〜！」

「やった！助けがきた！」

「あたいったら天才ね！」

「そーなのかー」

「まってる！今ほどいてやるからな！」

少年救出中・・・

「・・・ふう。これでよしと！」

「ありがとうございます！あの、お名前は・・・」

「僧音遼だ。よろしくな！」

「騒音量？」

「違うよチルノちゃん！蘇鵜穩霊だよ！」

「そーなのかー」

「言いたくなかったが言わせてもらおう。そんなわけねーじゃん！」

名前言わなきゃ良かったよ！まったく！

「あゝ」

「ん？なんだ？」

「頼みがあるんですけど・・・」

「ん？なんだ？」

「台詞使い回しって楽しい？」

「溶かすぞ」

「すみません」

「わかればよし。では大妖精、続けてくれ」

「あ、はい。この先の湖に得体の知れない妖怪が出てきてこのあたりの妖精皆やられちゃったんですよ」

なるほどだから敵が出てこなかったのか・・・

「はい。だから遼さんにその妖怪を倒してほしいんです」

なるほど妖怪を倒し・・・ってええ！無理無理無理！

「引き受けてくれますか？」

「無理！絶対無理！」

「なっ何ですか！？」

「俺は弾幕使えないんだよ！」

「それじゃあ道に落ちてる石ころ以下じゃん！」

「溶かすぞ」

俺はライターに火をつけた

「同じ手は通用しない！スペルカード！氷符アイシ・・・」

「ちょっとちょっとまった！行くから俺に弾幕当てないでくれ！凍っちゃうから！」

「・・・クルフォール！」

って止めないのかよ！

「うわあああああああ！」

そのとき、ルーミアがスペカを使った

「スペルカード夜符ナイトバード」

アイシクルフォースとナイトバードが衝突し、凄まじい爆発が起くる。

「二度目のうわあああああああ！」

俺はぶっ飛ばされてしまった

「ちょっと二人とも！遼さん飛ばされちゃったよ！」

「あたいったら天才ね！」

「そーなのかー」

「もう・・・」

この時俺は俺自身に秘められた力を知るはずがなかった。

「そーなのかー」

「空気読んで！」

「そーなのかー」

つつく・・・

第三話 芽生えし能力の発動（後書き）

遼少年はどこに飛ばされてしまったのだろうか・・・
次回「芽生えし能力の発動2」をお楽しみに！

第四話 芽生えし能力の発動2（前書き）

最近いえ最初から投稿が遅れています日輪です。

第四話 芽生えし能力の発動2

「いてて・・・」

俺はどうやら大妖精が強い妖怪が現れると言っていたUWASAの湖に来てしまったようだ。

「なんてこった・・・」

俺は立ち上がろうとしただが体が動かない

「これは・・・泥^{ぬかるみ}凪？」

だがこの程度のことは冒険に付き物俺はすぐに脱出した。

「さて、誰か居ないかな・・・」

辺りを見回したが霧で何も見えない

「これじゃあどうしたら良いかわからんな・・・」

そのとき

「フフフフフフフ・・・」

「誰だ!？」

振り向くとそこには、ちんまい女の子が立っていた。

「私の名前は狂無目子^{きやうむくし}。しかし、まだここに屑が居たのね・・・」

「なんだと！さてはお前ここで暴れ回ってるUWASAの妖怪だろ！」

「そんなこと知らないわここは私の物になったのよ！」

「だったら取り返すだけだ！」

「あら、あたしに勝てるかしら」

その言葉で俺は電撃のように思い出した

（しまった！俺弾幕使えないんだ！）

「俺はちよつと急用を思い出したから帰らせてもらおう！」

「まさかあなた弾幕出せないとか？」

ギクウ！

「フフフ・・・凶星のようね。それじゃあ・・・」

さようなら

そう言うとも子は弾幕を放ってきた。

シュバババババアアアア！

「チイツ！よけるしかねえ！」

ズガズガズガズガアアア！

地面に弾幕が落ち、そこにクレーターができた。

「おいおい！こんなの当たったら死んじまうぞ！」

「ええ、だからあなたはここで死ぬのよ。」

「死ぬ？冗談じゃねえ！」

「好きなだけあがきなさい。そろそろ終わりにしてあげるわ。」

そう言うとき目子は手から何か取り出した。

「っ！スペルカード！」

「あなたにはお似合いの末路でしょ？それじゃあ・・・スペルカード・泥符^{でいふ}「マッダーマッドスペシャル」！」

前方と後方から弾幕と計5本のレーザーが迫ってくる

（もう・・・終わりなのか・・・何かいい方法はないのか！？）

そう思ったとき奇跡が起こった

パアアアア

目の前に光り輝く輪が出てきた。

「うおっ！？なんだ！？」

「へえ、そんな力が残っていたなんてね。でもそれで何をしようと言うの？」

「力？・・・へっそうか、」

「何？その笑いは？」

「見せてやるよ俺の力を！」

シュバババババアアアア！

「弾幕！？なぜあなたが！？」

「芽生えたんだよ！俺の力が！」

ズガズガズガガアア！

「クッ！」

「まだまだあ！今こそ使うぜ！スペルカード・日輪にちりん」サンライトリ
ング」！」

シュパアシュパアシュパアシュパアシュパアシュパアシュ
パアアアア！

遼の無数の輪が現れる

「なんなの・・・これは・・・」

辺りは再び静かになり目子がかすれた声で訪ねる

「あなた一体何者なの・・・？」

「そーいやまだ名乗ってなかったな俺の名前は僧音遼、覚えておけ」

「騒音量・・・覚えておくわ・・・」

そう言って目子は霧の中に消えていった。

「・・・僧音遼だっつーの！ったく・・・」

遼も霧の中で歩き出した。

第四話 芽生えし能力の発動2（後書き）

遼少年は紅魔館で一体何をしでかすのか・・・（しでかされるのか）
次回「魔法使いと災難」をお楽しみに！

第五話 魔法使いと災難（前書き）

今回は早いと思います。日輪です

第五話 魔法使いと災難

俺は今紅魔館の近くまで来ている。ちょうど見える所さ。

だが俺の目に映ってるのは・・・

がれきと化した紅魔館だった。

普通なら「ええー！何この展開ええー！」と、騒いでしまうかもしれない。しかし俺はうろたえない。なぜなら、

紅魔館はがれきになっても紅魔館だから。

・・・ちよつとかつこつけすぎたかな？

「さて、そろそろ前置きを終えて行くかな・・・おっ早速誰か発見！これは芸を披露するチャンス！」

「ZZZZ・・・」

「こらっ！美鈴^{めいりん}！」

「いてっ！あつ咲夜^{さくや}さん今日も綺麗ですね」

「お世辞言ってもダメよ」

「（お世辞じゃないんだけど・・・）まあまあ、怒らない怒らない」

「怒らなくてどうするのよ！侵入されたから紅魔館がこうなったんじゃない！」

「す、すいません・・・」

「わかればいいわ」

「じゃあ許してくれるんですか!？」

「ええ」

「ありがとうございます！さすがメイド長！」

「でも！もう寝たりしたらだめよ。門番さん」

「はい！」

「その二人！」

咲夜・美鈴 「つ誰!？」

「何も言わずに俺の芸を見るがいい！　いくぜええええええ！」

少年披露中・
・
・

「・・・美鈴、何なのこのいきなり話しかけてきてしかも自信満々に芸を披露してくる旅芸人は？」

「いや私に聞かれても・・・ってああ！」

「どうしたの!？」

「今の変な人紅魔館の方向に行っちゃいましたよ！」

「なんですって!?! 美鈴! 追いかけるわよ！」

「はい！」

うゝん紅魔館に来たのはいいが妖精メイドたちがすごく忙しそうに働いてるな・・・ここはどうやら工事現場のようだ。

「まずは紅魔館で何があったのか聞くとするか。おっ! また誰か発

見！」

目にとまったのは座りながら本を読んでいる少女。

「よしでは早速行くとするか」

話しかけようとした時だった

「おい！その輪っか持った奴！危ないからそこよけろ！ぶつか
る！！！」

後ろからすごいスピードで何かがこちらに向かってくる

「へっ！？う、うわあああああああああああ！」

ゴチン！

気を失った・・・

「いてて・・・」

「おっ！気がついたみたいだな。ごめんなーぶつかっちまって」

「まったくもう・・・ごめんなさいね。私の名前はパチュリー・ノ
ーレッジ。こっちは霧雨魔里沙^{きりふめりさ}。」

「よろしくなんだZE☆」

「俺の名前は僧音遼よろしく！」

パチュリー・魔里沙「騒音量？」

「僧音遼！」

「ごめんごめん！でもあるだろ？魔法使いでもわからない事」

「いや俺知らなかったし」

「あら記憶喪失？」

「そこまでじゃねえよ！」

「じゃ記憶が忘れないうちに言っておくけど遼さん、あなた何しに
来たの？」

「おっと危うく言い忘れるとこだった。実は紅魔館で何があったの
かを聞きに来たんだ。」

「ああ、そうだったの。まあ簡単に説明するとフラン本気だして何とか止めたけど大爆発しちゃったってことよ。」

「なるほど。では教えてくれたお礼に俺の芸を見せてやろう！　いくぜえええええええ！」

少年披露中・
・
・

「お前すごいな！いい芸持ってんじゃない！」

「フラフープと歌を組み合わせるなんて斬新ね。」

「お褒めいただき感謝する！」

「じゃあ私はそろそろ帰るぜ。パチュリー、お前も来るか？」

「しかたないから来てあげるわ。」

「よし決まりだな。そんじゃあな！ 遼！」

「おう！ じゃあな！」

さて俺もそろそろ行くかな・・・

「まちなさい！」

「!?!」

第五話 魔法使いと災難（後書き）

遼さんを引き止めた人物とは・・・
次回「紅魔館大バトル！」をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008v/>

歌って回す幻想郷放浪記

2011年11月26日19時55分発行